

一夜の過ちで懷妊したら

秘密を知った御曹司の

溺愛が始まりました

それは、最悪な目覚めだった。

いつもなら、鳥の囀りさえずとカーテンの隙間から差し込む柔らかな日差しを浴びながら、スマートフォンできつちり午前六時にセットしているアラーム音で目覚める朝。

それが今日は、何故かそのどれもが無く。

自宅のものとは違う、サラサラと肌触りの良いシートとふわふわの掛け布団。頭の下には柔らかな枕があり、薄暗い空間。

「……え？」

身体からだを起こしてベッドに座る。その状態のまま、今の状況を理解するまでにどれくらい時間を要しただろうか。

ふと近い距離で何かが聞こえることに気が付き、恐る恐る顔を左に向けた。

「……っ!？」

叫びそうになった口元を慌てて両手で塞ぐ。

その音の正体が、気持ち良さそうな寢息だったからだ。しかもその寢息を立てている人物は、男性なのだ。驚かないわけがないだろう。

艶のある黒い髪の毛は、寝癖なのかあちこちに跳ねている。掛け布団の上からでも鍛え抜かれて

いることがわかるがっしりとした体型。

そして……おそらくは、一糸纏まとわぬ姿。

もしかしたら布団の下で下着くらいは履いているかもしれない。けれど、ここからは何も着いていないように見えた。

どうということ……!?

唇を震わせながらも、今度は自分の姿に目をやって驚く。全く同じ姿。それどころか下着すら身に付けていないことに気が付いて、思わず布団を手繰たぐり寄せた。

しかしどうやら同じ布団に包まっていたようで、私よりも大柄な身体が布団を追いかけて寝返りを打つように少し動く。

それにピクツと肩を跳ねさせながらも息を殺す。すると再び寝息が聞こえ始めたのを感じて一つ、深いため息を吐いた。

まず、まずは。今の状況を整理しよう。

パニックになりかけていた自分を落ち着かせようと、何度も深呼吸を繰り返した。

バクバクと鳴る心臓と震える口元は変わらないが、さっきよりはマシだ。

とりあえずこの姿をどうにかしたい。視線だけを動かして、ベッドの下に自分の下着が落ちているのを発見。急いで布団から出て下着を拾い集め、ベッドの影に隠れるように壁との隙間に入り込んで下着を身につけた。

下着を付けたらなんとなくさつきよりは落ち着いたような気がして、ゆっくりと一息吐く。そし

て近くにあった鞆の中から音を立てないようにスマホを取り出した。

時刻は早朝四時。当たり前だが、いつもならぐっすりと眠っている時間だ。だからアラームも鳴っていないんだ、なんて現実逃避で別の事を考えそうになるけれど、そんな場合じゃない。

スマホを鞆に戻し、改めて寝息を立てている男性の顔を覗き込む。目を閉じていてもわかる、端正な顔立ち。

それは、私の知っている人だった。

薄く開いた唇から漏れる呼吸に、うつすらと昨夜の情事を思い出した。

私は都内に自社ビルを構える大手食品メーカー、【AOI Corporation】の総務課で働いている二十六歳のOL、鮎原美玲あゆはら みれい。

そして今日の前で寝息を立てている人物は蒼井彼方あおい かなた、三十五歳。うちの会社の副社長である。

どうして末端社員の私が副社長と今、寝床を共にしていたのか。それは数時間前に遡さかのぼる。

付き合って三年になる彼氏に振られたのは、青天の霹靂へきれきと言っても過言ではなかった。

大学の頃の同期で、卒業後に偶然街中で再会。お互いフリーだったことと、昔から仲の良い友人だったことからとんとん拍子で付き合うことに。

三年間、特に喧嘩も無くお互いの家を行き来したり連休が取れば旅行に行ったりと、平和なお

付き合いをしていた。お揃いの食器を買ったり、記念日には豪華なディナーに行ったり。漠然と、私達はそのうち結婚するんだろうなと思っていた。

——それなのに。

“別れてほしい”

寒さの厳しい一月の終わり。急に仕事帰りに呼び出されたと思ったらそんなことを言うものだから、しばらく頭が理解しようとしなかった。それくらい、予兆が無かった。

どうして急に聞けば、“他に好きな人ができた”と言うから、また理解できなかった。

言いにくそうに口籠る彼を問い詰め、ようやくその理由を知った。

どうやら私は、ずっと二股を掛けられていたらしい。私と付き合う前までは確かにフリーだったらしいのだが、私と付き合い始めてすぐにもう一人の女性とも出会い、どちらかに絞ることができなかったのだという。

“本当にごめん。でも、美玲のことが嫌になったわけじゃないんだ”

じゃあ、どうして私を捨てるの？

その言葉を飲み込むのに必死で。可哀想な女だと思われたくなくて。

“わかった。今までありがとう。さよなら”

責めることも、罵ることも、泣いて縋りつくこともできなかった。

一人になって、嫌と言うほど泣いた。

あんな無責任で最低な男なんて、こっちから願ひ下げだ。そう思っても、やはり悔しいものは悔

しくて。

三十歳になる前に捨ててもらって良かったと思うべきなのか、そもそも二股に気付かず一人で結婚を意識していた私ってなんだったんだろうとか。

考えれば考えるほど、どんどん自分への苛立ちと相手への怒りで身体が震えた。

しかし最後に残るのは虚しさや惨めな自分の姿だけ。

家に帰れば、嫌でもお揃いのものが目につく。いつも使っていたお気に入りのマグカップ。色違いの歯ブラシ。一緒に買ったふわふわのバスタオル。

どこを見ても彼との思い出ばかりなのに、もう彼はいない。ひとりぼっちの自分が惨めで仕方なかった。だから目につくものを全部捨てて、全部買い直して。

そんな自分の状況を直視したくなくて、現実逃避のために一人、連日飲み歩いていた。

昨日も居酒屋を数軒ハシゴしていて、最後に入ったのが駅から少し離れたところにあるバー、

【Rose】だった。

そこは落ち着いたインテリアとクラシックのBGMがとても上品で、いるだけで心を穏やかにしてくれるお店。良いお酒を取り揃えていて、その分金額は高いけど美味しいお酒が飲める。

仕事でミスした時、今回みたいに恋人に振られた時、大きな悩みを抱えた時。何かある度にここで飲むのが、私の中の決まりだった。

そして昨夜、そのバーで出会ったのが蒼井副社長だった。

一番奥のカウンター席に腰掛けてウイスキーをロックで飲んで了我的隣に、そっと現れたのが

彼だったのだ。

「……ご迷惑でなければ、ご一緒してもよろしいですか？」

何の前触れもない声に、最初は私に話しかけていることに気が付かなかった。

「……え？ 私ですか？」

「はい。是非」

「……私と飲んでも、別に面白くないですよ？」

そんな嫌味を口にしたがら顔を向けると、何処かで見たような顔が視界に入ってきた。

キリッとした二重の目、高い鼻に薄い唇。オールバックにセットされた黒髪と高級そうなスリーピースのスーツ。

こんなイケメン、一度見たら忘れないはずなのに。酔っているからだろうか。この人がどの誰なのか全く思い出せなかった。

「……面白いかどうかは、ご一緒してみないとわかりませんよ」

「……」

「それに、貴女とお話ししてみたいなと思ったただけなので。……ダメですか？」

「……お好きにどうぞ」

可愛くない返事だと、自分でも思う。でも、今の私にはそんな余裕が無いのだから仕方ない。

いくらイケメンでも、たとえこの彼が相当なお金持ちだったとしても、たとえ芸能人だったとしても。

傷心中の私には、何も響いてこないだろう。

彼は私の返事を聞くと本当に隣に腰掛けて、マスターに私と同じものを注文した。

そしてすぐに出てきたウイスキーが入ったグラスを私に向けてほんの少しだけ上げてみせると、一口飲んで微笑んでみせた。

「ここにはよくいらつしゃるんですか？」

「……頻繁ではないです。たまに」

質問されると条件反射で答えてしまう自分が今は恨めしい。一人で静かに飲みたいのに、彼は隣で勝手に喋りかけてくる。

「僕もたまにです。このお酒が美味しくて、好きなんですよ」

「……確かに美味しいですよね。こういう時……落ち着きたい時には一番いいです」

だからついつい来てしまう。

嫌なことがあったからって、お酒を飲んでも何も解決しないことくらいわかっている。

でも、こうやって何も考えずに飲んでいる時間は、私にとっては気持ちをリセットさせてくれる大切なものだ。

「……ついでに？」

「……いえ、すみません。私の話ですので、どうかお気になさらず」
危ない。余計なことを口走りそうになった。

私は酔うと思っていることまで口に出す傾向にあるらしいから、気を付けないといけない。
自分で理解してはいるものの、酔うとタガが外れてしまうのだから我ながら困ったものだ。
それなら飲まなければいい話なのだが、今の私に限ってはそうも言っていられない。飲まなきゃ
やっつけられない。平常心を保てない。

「僕は、嫌なことがあった時とかにここに来ていことが多いです」

「……え？」

私が口に出したのかと思うくらい、同じことを言っていて驚いた。

隣に視線を向けると、彼は恥ずかしそうに笑っている。

「実は今日、仕事で上手くいかないことがあって。このお酒を飲んでとりあえず落ち込んだ気持ちを立て直そうって思ってたんですよ」

「そう、でしたか。……私と似てますね」

「……え？」

今度は彼が目丸くする番だった。

似てる。そう思ったら、警戒心が少しだけ解けた。

「私も、嫌なことがあった時や仕事でミスした時なんかに来ることが多くて」

「そうなんですか？」

「はい。なんというか、このお酒を飲むと気持ちがりセットする感じがして」

「わかります。……美味しくて、お店の空気も素敵で。心がほっとするんですね」

「はい。そんな感じです」

まさかわかってもらえるとは思っておらず、頷きながら笑みが溢れる。

こんなところで一人でウイスキーをロックで飲んでいるだけで引かれてしまいそうなもののに、

彼は

「このウイスキー美味しいですね。よく飲むんですか？」

なんて、引かずに話題も広げてくれる。

「いつもはもうちょっと軽いカクテルを飲むんですけど、今日は強めのが飲みたくて」

「そうでしたか。僕も強めのが飲みたかったので、真似してしまいました」

柔らかに笑う彼のような人に出会ったのは、初めてだった。

ウイスキーにだけ注がれていた視線が混じり合う。

その絡み合った視線はなんだか熱を帯びていて、それは解けることを知らない。

バクバクと高鳴る鼓動はアルコールのせいかな、はたまた別の要因か。その澄んだ瞳に、そのまま
吸い込まれてしまいそうな錯覚を感じた。

「そうだ、失礼ですがお仕事はどのようなもの？」

柔らかな視線に、私は下を向く。

「……普通のOLですよ。役職も無い、ただの事務職です」

本当は営業志望で入社したけれど、私の代は営業志望がとて多く私は総務の事務職に配属になった。

事務は事務で仕事量は多いし大変だ。女性が大半だから特有の噂話や陰口がよく飛び交っていて、疲れる場面も多い。

営業で飛び回っている同期を見たりしていると、羨ましいと同時にどうして私は、なんて卑屈になったりもする。そしてそうやって悩んでいるうちに疲れてきてしまう。そういう時もここに逃げ込んでいたりしていた。

営業に異動願いは散々出しているのに辞令が出る気配もないし、このままだとスキルアップも見込めない。家に帰って転職サイトでも登録してみようか。なんて。

……ダメだ。これ以上は本当に余計なことばかり喋ってしまいそう。

お酒の力か、彼の柔らかない雰囲気か。彼には何故かぼろぼろといろんなことを話してしまいそうだ。

ふと腕時計を確認すると、もうすぐ終電の時間だった。

「そろそろ帰らないと」

と私はウイスキーを飲み干して荷物に手を伸ばす。

外はおそらく冷え込んでいるだろう。いくら酔って体が火照っているとはいえ、しっかりと防寒しなくては。

しかしコートを手織ろうとすると、隣から手が伸びてきて腕を掴まれた。

「え？」

「もう、帰られるんですか？ 何かご用事でも？」

「……いえ、特には。そろそろ終電の時間なので」

「僕がタクシーでお送りしますから、よろしければもう少し一緒に飲みませんか？」

そこまでして私と飲みたいなんて、変な人もいるものだな。

既に大量のアルコールを摂取している私は思考が安定していない。

誘われれば誘われるがまま、

「……そういうことなら、わかりました」

とコートから手を離れた。

すると彼は安心したように少し微笑んだ後に、何を思ったか掴んでいた腕を伝い、そのまま私と手を繋ぐ。

「……何をなさってるんですか？」

「あ、すみません。嫌でしたよね」

「嫌というか……驚いただけ、です」

「すみません。小さくて柔らかくて、綺麗な手だなと思っていたらつい……」

その行動と恥ずかしそうな姿に少しだけときめいたのは否めない。

私も相当酔っているけれど、彼も同じくらい酔っているのかもしれない。

目が鋭いから怖そうに見えるのに、言動は丁寧だしどうやら見た目よりも大分ビュアなよう。

こういうギャップに女性は惹かれていくんだろうなあ、とマスターから受け取った追加のウイスキーを持って考える。

私はアイツに、そんなときめきやギャップを感じさせることができていたのだろうか。いや、できていなかったからフラれてしまったのだろう。

容姿はそこまで悪くないと自負しているものの、きっともう一人の女性の方が綺麗で可愛くて愛嬌があつて、アイツをその気にさせるのが上手かったのだろう。きっと、一緒にいて将来を見据えることができる存在だったのだろう。

真実はどうかかわからないものの、“私よりも魅力的な女性だったのだ” 私では敵わないくらい素敵な女性だったのだ” と思っていないと、やっていられない。

ふつふつと湧いてくる相手女性に対しての羨望と妬みが、私をどんどん醜くしているような気がした。

深いため息を吐くと、隣から視線を感じた。

「……今日は、何か嫌なことでもあつたんですか？」

「……え？」

「不躰な質問ですみません。でも僕と同じということは、貴女も何かあつてここに來たのではないかと思います」

「……」

「それに、強めのお酒が飲みたい時は、大体何かを忘れたい時じゃないかなと思うので」

ビー玉みたいに綺麗な瞳に見つめられると、私のこのドロドロとした心の中まで見透かされているみたいで、ヒク、とこめかみが動く。

……ああ。こういう内面から滲み出てくるもので、負けたのかなあ。

そう気が付いて、目の前の彼は関係ないのに。

そのビー玉みたいな目を見つめ返して、どうしてこうなってしまったんだろうと思っていたらだんだんと目に涙が滲む。

それに気が付いた彼が、慌ててポケットからハンカチを出して私の目元を拭いてくれた。

「申し訳ありません。初対面で失礼でしたよね。今のは忘れてください」

一気に眉を下げた彼に、口が開いた。

「……この間、フラれたんです」

「……え？」

「三年付き合ってた彼に、フラれてしまいました。二股かけられていたようで、そちらの女性を選んだらしいです」

「それは……おつらいですね」

「何が負けたんだろうって思ってたんですけど、きっと全部負けてたんだろうなって思ったら、自分がどんどん惨めに思えてきて。……ダメですね、もう何日も経つのに。こんな話、確かに初対面ですることではないですよ。すみません」

「いえ、僕が先に聞いてしまったんですから、どうかお氣になさらず。つらいことをお話しさせて

しまつて、むしろ申し訳ありません」

よろしければどうぞ、と渡されたハンカチ。

「いえ、汚れてしまいますから」

「気にしないでください。……と言っても、そうですね、初対面だから気にするのも当然ですよね」

「はい。もう会うこともないでしょうし」

今日会ったのも偶然だ。お互いが常連だったとしても、次に会うことがあるかなんてわからない。一期一会というやつだ。

だから、と遠慮するものの、何故か彼がその手を下げることはなかった。

「でしたら、今度お会いした時に返していただければいいですよ」

「え？ いやですから……」

もう会うことはないって言っているのに。

「会えば良いだけじゃないですか」

「それは……そうかもしれないけど」

酔っているから、彼が何を言っているのかまいちよくわからなくて。

……でも。

「もう会えないかもしれないなんて、そんな悲しいこと言わないでください」

「え？」

「僕は、また貴女に会いたいです」

ストリートな言葉が、胸に響く。

「僕は、この出会いをただの偶然にたくはありません。最初に最後にたくありません」

困ったような、でも真剣な顔でそう言われると、気を遣っているのだとしてもなんだか照れてしまう。

落ち着け、落ち着け私。これは単なる社交辞令だ。本気なわけがない。

そうやって深呼吸をするものの。

彼の瞳は至って真剣で、冗談だとか社交辞令だとは到底思えなかった。

「……あ、え……つと。わ、かりました。……じゃあ、洗ってお返し……しますね？」

驚きつつもとりあえずそう答えて受け取ると、

「はい」

とても嬉しそうに笑った。

その笑顔に心臓が鷲掴みにされたようにドクン、と大きく一つ高鳴る。鋭い目元からは想像もつかないほどに可愛らしい笑顔。

子どもみたい。心の底から嬉しそうな笑顔に、胸が高鳴った。

受け取ったハンカチは、大人の男性を感じさせるシンプルかつ高級なブランド物のよう。きつと相当良い企業にお勤めなのだろう。

驚きすぎて涙も止まってしまったけれど、借りた手前使わないのも失礼かと思って目元を数回お

さえた。

「……あ、申し遅れました。僕、蒼井と申します」

「……あ、すみません。私今名刺持つてなくて……」

「いえ、大丈夫ですよ」

「すみません、頂戴します」

ふと思いついたように渡された名刺を受け取る。

そこに記載された名前を見て、今度は驚いて叫びそうになった。

【AOI Corporation代表取締役副社長：蒼井 彼方 kanata Aoi】

見慣れた社名と、普段見慣れない副社長の文字。

蒼井……彼方？

その名前は、どこか聞き覚えがあった。

「……AOI Corporation……副社長……」

思わず呟くと、彼は少し恥ずかしそうに微笑んだ。

「ええ、お恥ずかしいことにまだ就任したばかりで、その肩書きに見合うだけの働きはまだできていないのですが」

「……そんな、ご謙遜を」

ぐるぐると、頭の中をたくさん情報が駆け巡る。まさか、この人がうちの会社の副社長だったなんて。

たしか、副社長は現会長のお孫さんで現社長の御曹司だと聞いたことがある。

元々は別の支社にいたものの、数ヶ月前に本社の副社長に就任。まだ副社長としては日が浅く忙しそうに働いていると聞く。

直接お会いするのは初めてだからか、当たり前だが私のことはどうやら気が付いていない様子だった。

そんな噂の副社長なのだとしたら、顔が良いのも納得だ。うちの会社では“蒼井家は皆美形だ”というのは有名な話。支社にいた頃から女性からのお誘いは絶えなかったと聞く。

どうしよう。そんな副社長と一緒にバーでお酒を飲んで、さらには私物のハンカチまでお借りしてしまった。

うちの総務課でも副社長のファンは多く、色々な噂が飛び交っているのを知っている。

……バレたら、やばい。確実にやばい。私の平穏な人生が崩れ去る。それだけは避けなければ。私が同じ会社の部下だということを、どうにか隠さないとけない。

どうしよう。どうしよう。

頭の中がぐわんぐわんと揺れる。焦りと不安が視界を揺らし、酔いが回って何も考えられなくなる。

「……貴女のお名前も、お伺いしてよろしいでしょうか」

そっと問いかけるような視線が、私を射抜く。

「……鮎原、です」

苗字だけを答えた自分をほめてあげたい。

「鮎原、さん」

「……はい」

呼ばれた声に、返事をする。しかし頭はボーッとしたまま。副社長の顔をじっと見つめたまま動けない。

それに何を思ったのか、副社長はほんの少し頬を染めたような気がした。

「鮎原さん。もう一時近くになりますので、そろそろお送りします」

「……もうそんな時間ですか？」

「はい」

グラスに残っていたウイスキーを飲み干す。

ダメだ、さすがに飲みすぎた。頭が働かない。

自分で思っていたよりも酔っていたようで、足下が覚束おぼつかずに副社長に身体を支えられながら立ち上がる。

会計を済ませてお店を出ると、冷たい風が刺すように吹き抜ける。しかし今の火照ほてった体にとってはまるで包み込んでくれるかのようで、全身を冷やしてくれるのが心地良いとさえ思う。

「……鮎原さん？ 大丈夫ですか？」

「はい。だいじょうぶ……」

です。と言おうとしたものの身体がふらついて倒れそうになる。

それを副社長が咄嗟に支えてくれた。

「……すみません」

もう自分で立てるのに、副社長は私から手を離そうとしない。

それどころか、そのまま私をギュッと抱きしめた。

「……もう時間も遅いですし、どこかで休んでいきませんか？」

「……それは、もしかして」

働いていない頭でもわかる。……それは。

「……はい。誘っています。口説いています」

「どう、して」

「……今、貴女を帰したくないと思ったので。……それだけでは、ダメでしょうか？」

耳元で囁く甘い声が、私を誘惑する。

ダメなのに。絶対にダメなのに。

寂しい。しんどい。つらい。一人は嫌だ。誰かと一緒にいたい。

抱きしめてくれる腕が優しく。その温もりが心地良くて。縋り付いてしまいたくなる。

頭ではダメだとわかっていながら、身体は正直で。

気が付けば、ゆっくりと頷いている私があった。

それに安心したように私の腕を引いた副社長。タクシーに乗り、無言のまま着いた場所は入ったこともないくらいの高級ホテルで。

「すみません、ダブルの部屋しか空いていなかったようで」

返事をするより前に、部屋に案内された。

高級ホテルだからだろうか。ダブルルームでもとても広くて綺麗なお部屋。

中央にあるダブルベッドに腰掛けると、副社長がもう一度私を抱きしめる。

「ふ、……蒼井さん？」

危うく“副社長”と呼びかけそうになって、一瞬言葉に詰まった。それに気が付いているのかいないのか、はたまた気にしていないのか。副社長は肩口に寄せていた顔を起こしたかと思うと、そのままそっと唇を重ねた。

最初は触れるだけで。そこから何度も角度を変えて。

そして、一瞬離れたかと思うとお互いがお互いを見つめ合う。

「僕なら、貴女に寂しい思いはさせません」

「……え？」

聞き返すものの、それには答えてくれない。

ビー玉みたいな瞳は先程よりも熱を帯びていて、キラキラというよりもギラギラと言った方が正しそうだ。その瞳が私を射抜くようにじっと見つめてくる。

そしてまた伏せられた目元。

再び重なった唇からは舌が入り込み、私の口内を犯すように刺激する。

「ふぁ……んん」

優しい言葉遣いやエスコートとは全然違う、荒々しいキス。それなのに甘さを感じるのはどうしてだろうか。次第に口の端からは吐息が漏れ、私も無意識のうちに副社長の首に腕を回していた。

それが合図かのように、彼は私の服の中に右手を這わせ、空いた左手は私の後頭部を押さえて激しいキスから逃れられないようにした。

元々酔いが回って働いていなかった頭。

今度はそれと併せてキスにより酸素が薄くなり、また意識が朦朧とする。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

一瞬唇が離れた隙に慌てて呼吸するものの、そんな仕草を彼は笑って見つめてきて。

「……かわいい」

一言そう呟くと、またキスが降ってくる。

そのまま頬を伝い、耳の裏をざらりと舐められる。

「ひゃっ……!」

甲高い声に、耳元で小さく笑った声が聞こえ。

そのまま首筋を舌が這い、鎖骨辺りに何度も吸い付くように赤い跡をつけられてしまった。

それに気を取られているうちに腹部を撫でていた手が徐々に上に向かい、お世辞にも大きいとは言えない胸の膨らみを下から掬い上げるように刺激する。

その頂に指が触れた時、下着越しなのに

「ひぁっ……そこ、だめ……」

と甘い声が漏れてしまう。

「ダメ？ ……身体は嬉しそうですね？」

「ちょっ……まって……」

「本当に可愛い」

再びキスをしながら器用に脱がされた服。下着姿になると同時に広いベッドに押し倒されて、上に跨るようにしてから私の両手を自分の両手と繋いで何度も甘いキスを降らす。

下着の肩紐を外され、そのまま胸が露わになると恥ずかしさの余り手でおさえる。だけど、彼は私の手に何度もキスを落とし、そのまま手の甲から肩まで舌を這わせた。

「んんっ……あ、まっ……て……」

アルコールが媚薬のように私の身体を敏感にしている、唇や舌が触れるだけで背中がぞくりと震える。まるで全身が性感帯になったんじゃないかと錯覚するほどに、甘い吐息が何度もこぼれ落ちた。

手から力が抜け、あつという間に横に避けられて。それを待てましたと言わんばかりに、彼の手が優しく膨らみを包み込んだ。

「ん……あ、だめ……」

壊れものを扱うかのように、優しく揉みしだく手。次第にそれは舌に変わり、また背中がぞくりと跳ねた。

「あ、あ、あ……」

それでも、その舌は焦らすように頂には触れなくて。もどかしくて、苦しくて、身を振るように自ら快感を求めてしまう。

「ふふっ……かわいい」

そんな私に何度も可愛いと呟きながら、彼の舌がくるくると頂の周りを舐める。

「も、焦らさないで……」

ついに私が耐えられなくなつてそう呟くと、その目が一段深いところに沈んだように、またぎりと光ったように見えた。

そして次の瞬間、彼の唇が頂を含み、吸い付くように口の中で転がす。

「っ！ ああっ……んんっ、あ、あっ……！！」

突然襲ってきた強い刺激に背中を仰け反らせ、快感を逃すように嬌声をあげる。だけど、反対側まで彼の指できゅっとなじまれている。

同時に襲う快感に、一瞬頭が真っ白になりそうになった。

「はあ、はあ、んん……っ、んう……」

上がる息を飲み込むような激しいキスについていくのがやっとで。もう一度首に腕を回すと、耳に噛み付くようなキスが降ってきた。

……どうして私は今、こうして副社長と身体を重ねているのだろうか。

どうして、アイツに振られたんだろう。

どうして、私じゃダメだったんだろう。

副社長に抱かれているのに、無意識に副社長とは別の人のことを考えていた。嬌声を漏らしながら、私を振った相手を重ねてしまっていた。

それがどれだけ失礼なことか、考える余裕も無く。目尻から耳にかけて、涙が一筋流れる。それを見て、副社長はピタリと動きを止めたかと思うとすぐに熱い舌がその涙を掬うように舐めた。

「ビャッ……」

「その涙は、誰を想つてののですか？」

「え……？」

「僕に抱かれながら、別の人のことを考えている余裕があるなんて……ちよつとショックですね」

「え、あ……」

言葉と共に手が離れて、私の身体を撫でるようにどんどん下に降りていく。

「だめ……」

足を持ち上げられて、下着越しに一番敏感なところをその細長い指が撫でる。

「あっ！……」

「もうグチャグチャに濡れてますよ」

「言わないでっ……」

恥ずかしさで空いた手で顔を覆う。しかしそれを持ち上げられて深いキスが落とされた。

「誰を想つてこんなに濡らしてるんですか？」

「え、やっ……」

「誰のことを考えてるんですか？」

それに返事をする間も無く、彼はフツと笑ったかと思うと私の足の間に顔を埋めてきて。

「他の男のことなんて考えてる余裕、無くしてあげますよ」

「や……やっ!? だめ！ あっ、そんな、とこっ……だめえ……」

下着をずらしながら熱い舌で刺激されて、その快感にビクンと跳ねて、頭が真っ白になる。視界に色が戻る前にナカに入り込んだきた指。縦横無尽に駆け巡るそれを、無意識に身体は締め上げる。

「きつつ……。指でこれなら、僕のを入れたらどうなるんでしょうね……」

そんな言葉は、叫ぶように喘いでいる私には届いておらず。一瞬刺激が止まったかと思えば下着を脱がされ、再び同じ刺激が襲う。

「もう……だめっ」

「イッていいですよ」

いきなり激しくなった指の動き。私は呼吸さえも上手くできずに何度も視界が白く染まる。

「あ、あ、あ、あああああっ!?」

ビクンッ、と数回大きく身体を跳ねさせて、チカチカする視界にまた泣きそうになった。

「……今度は、僕のこともち良くしてくださいね」

言うが早いのか、すぐさま滑らかに入り込んできた副社長自身の熱いものを感じ、意識が飛びそう

になっていたのにその圧迫感と快感で起こされた。

さらにキスで唇も塞がれて、呼吸さえも苦しい。

口の端から唾液が漏れて、苦しくて逃げたいのにぐったりとした身体では無理で。さらに大きな手がそれを阻む。

「んんう……ん、ん、んんっ」

浅いところを何度も出し入れして、たまに敏感なところを指でざらりと撫でる。その度に腰が浮き、背中が跳ね、目の前の彼の頬が染まった。

「……綺麗だ。鮎原さん」

首を何度も横に振り、快感から逃れようとするけれど。

「っっ!!」

「ごめんなさい、僕が限界です……っ!」

「あああっ! んんっ、あ、っあ……!」

はやる気持ちに比例するように早くなる律動。さつきまで浅いところだったのに、今度は奥深くまで貫いてくるものだからもう何も考えられなくて。

「だめっ……だめっ……! またくるっ……きちゃう!」

「イキたい? ですか?」

「うんっ、ん、ああっ! んんっ、いき、たいっ」

「僕もっ、そろそろっ……っ」

「あ、だめっ……! イク……イクッ!」

どんどん動きが速くなりお互いの呼吸が混ざり合い、卑猥な音と自分の喘ぎで何度目かの頭の中が真っ白になり。

——そのまま、大きく身体を跳ねさせて気を失った。

全てを思い出して、私は沸騰しそうなほどに全身を真っ赤に染め上げた。

なんてことを……!? 酔っていたからといって、私はとんでもないことをしてしまったようだ。

そして今どうすればいいのかを頭をフル回転して考えた。

そうだ、まだ下着姿のままだった。まずは、服! 服を着よう!

辺りを見回して脱がされたであろう自分の洋服を見つけると、再び音を立てないように静かに着替える。こんなに早く着替えたのは久しぶりだろうか。

服を着終わってとりあえず副社長をしてみるけれど、まだすやすやと眠っているようだ。無理もない。連日忙しくて働いているだろうし、情事を終えて眠りについてから全然時間も経っていない。

……今のうちに逃げるしかない。

財布からお札を数枚出して、サイドテーブルに置く。こんな高級ホテル、この金額では到底半分にも満たないだろう。だけど、今はこれが限界で。忘れ物がないかどうか確認もそこに、その

まま逃げるように部屋を飛び出した。

まだ酔いが覚めていない身体に、冷たい風が染みる。黒く沈んでいく私の心とは対照的に、空はじんわりと白み始めていた。

昨日の自分に今日の自分が憤慨していた。いくら酔っていたからって、ほぼ初対面の男と寝るなんて何をしているんだ。

いや、でも副社長も副社長だ。何で初対面の女を抱いた？ こんな高級ホテルで？ どうして私を？ 傷心中ですぐ抱けそうだったから？

考えれば考えるほど、わからない。

とにかく早くできるだけ遠くまで逃げたくて、走って走って。一番近い駅まで走って、そこでタクシーに乗った。息が切れる。呼吸を整えながらタクシーの運転手に住所を伝え、できるだけ早くと催促した。

要望通り最短ルートで帰った自宅。お金を払ってマンションに逃げ込むように入ると、やっと心を落ち着かせることができた。

靴を脱いで、荷物を置いて。ソファに座ると、安心したのか涙がとめどなくこぼれ落ちた。

これからどうしたらいいのだろう。これで本当に終わったのだろうか。でも、逃げてくるなんて不誠実にもほどがあるんじゃないのか。

考えれば考えるほど頭の中がぐちゃぐちゃになっていって、髪の毛をかきむしるように頭を抱えた。

……とりあえず、シャワー浴びよう。

心臓がバクバクいつていて、とにかく一度全部を洗い流したい。全部リセットしたい。全身をくまなく洗って、お気に入りのバスソルトを入れて早朝から湯船に浸かる。

これ以上思考を働かせると昨夜のことを思い出してしまうから、何も考えずにひたすら頭の中で素数を数えていた。

——そしてその二日後。

「……おはようございます」

「おはようございます」

ビクビクしながら出勤した私を、同僚達は皆いつも通りの空気で迎えた。

副社長とのことはどうやらバレてはいない様子。しかしいつバレてしまうかもわからない。そうなったらもう、女性社員の半数以上の反感を買うに違いない。

火の無い所に煙は立たないと言ってくらいだ。どこから噂が広まるかわからない。

……転職、やっぱり本気で探そう。

仕事のことも副社長とのこともあり、私はこの土日に転職サイトにいくつか登録していた。

しかし見てもめばしい求人はずに無かった。しばらくまだここで働くしかないだろうか。

小さく溜め息を吐きながら仕事を始めて数時間。昼休憩の時間になった時、同じフロアの隣にある営業部の方からざわざわとした声が聞こえて来た。

「かつこいいよねえ」

「芸能人みたい。人気があるのも頷けるよね」

「支社でも大人気だったんでしょ？」

「お誘いが絶えなかったって噂ですよね」

女性社員たちの噂の声に皆自然とそちらに目をやっており、私も右に倣ってそちらを向いた。遠目からでも見える、人だかり。

「……!？」

その中心にいる人物がちらりと見えた瞬間、私は鞆を持ってフロアを飛び出した。

……な、なんで副社長が営業部に來てるの!? 見つかる前に逃げないと!

あの目を、見間違えるはずがない。つい数日前に、嫌というほど見つめたのだから。

それを思い出して、また顔が火照った。

ダメ、思い出さないうって決めたんだから。

首を横に振って邪念を払い、エレベーターを待つ時間も惜しくて階段で駆け降りる。自社ビルを出たころ、ようやく深く息を吐いた。

とりあえず上手く逃げられたようだ。

今見つかるわけにはいかない。営業部に現れただけであんな人だからができるほどの人気者だ。

一晩でも寝たとバレたらファンの人達に恨まれるかもしれない。

恐怖に慄いた私はそのまま予定に無かったランチに出向き、昼休憩が終わるギリギリにフロアに戻った。

「鮎原さん、おかえり」

「あ……はい、ただいま戻りました」

「外にランチ行くななんて珍しいね？」

「はは、ちよつと行きたいところがあつて」

フロアに戻つてすぐに隣のデスクの田中^{たなか}さんに話しかけられたけれど、うまく誤魔化したかどうかはわからない。だけど、さりげなく副社長のことを聞くには良いチャンスだと思った。

「そういえばさっき、営業部の方賑やかでしたけど……?」

「ああ、副社長が営業部に用事があつたみたいだね。初めて見たけど噂通りすごい美形でびっくりしちゃった」

「そう、だったんですね」

「本当目の保養だったわあ……鮎原さんもいればよかったのに。あんなレベルのイケメン、なかなか拝めないわよ」

「ははは……お目にかかれず残念です」

よほど嬉しかったのだろう、見たことないくらい田中さんの顔は緩んでいて、やはり外に逃げて正解だったと安堵の息を吐く。

よく耳をすませてみれば、フロア内のあるところから副社長の噂が聞こえていた。やっぱりすごい人気なのだと改めて思う。

今回は逃げられたけれど、もしまた営業部にやつてきたら? もし、総務にまで足を伸ばしてき

たら？

そう考えただけで今後の身の振り方を考えてしまい、仕事が終わった後に一本の電話をかけた。

『もしもし？ 美玲？ どうしたの？』

「静香、急にごめん。ちよつとお願ひしたいことがあつて」

『お願ひ？ どうしたの？』

静香は、学生時代からの友人。近頃のオフィスビルで営業としてバリバリ働く子で、同い年で友人の間柄ながら私がずつと尊敬して憧れている子。ハキハキしていて決断力もあつて。営業成績も良くみんなに頼られているキャリアウーマンだ。

「実は、前に言つてた転職。本気で考えてみようと思つて。静香のところ、確か前に募集してると言つてたよね？」

『ああ、そうだね。多分まだ募集かけてると思う。でも美玲、ついこの間もうちよつと粘つてみるつて言つてなかつた？』

「……うん。異動願ひはずつと出してたんだけど、やつぱり無理みたいで」

『そっかあ……。うん。わかつた。一応上に確認してみるね』

「ありがとう！」

電話を切つて一息吐いた。

——それから一ヶ月後。

あれほど警戒していたものの、この一ヶ月副社長がこのフロアに来ることはなかつた。

時間が経つにつれて、あれは夢だったのだと自分の中で納得させることができるようになっていた。

「鮎原さん、このデータ打ち込んでくれる？」

「わかりました」

上司から資料を受け取り、パソコンの前でキーボードを叩く。

新しい仕事は静香に紹介してもらえることになり、今度面接に向かう予定だ。

悩みが全て解決したわけではないけれど、少しずつ前に進み始めたような気がして安堵していた。

そんなある日の金曜日。

仕事終わりに自社ビルを出たところで、街灯の下で人だかりを見つけてしまった。

……何だか、すごく嫌な予感がする。

さりげなくその人だかりから遠ざかろうと歩き出した時、後ろから

「鮎原さん！」

と私を呼ぶ声が聞こえた。

「は、い？」

振り返ると、田中さんが私のスマホを持ちながら走つて来ている。慌てて向き直ると、田中さんがホツとしたように私に笑顔を向けた。

「鮎原さん、良かった。デスクにスマホ忘れてるつて思つて走つて来たのよ」

「あ、すみません。ありがとうございます」

「電話か何か鳴ってたみたい。中は見ていないから安心してね」

「そんな、ありがとうございます。助かりました」

「気を付けてね、じゃあまた来週。お疲れ様」

「はい。お疲れ様です」

田中さんに何度もお礼を言って、スマホをしつかり握って歩き出そうとすると、今度は横から手を掴まれてスマホが滑り落ちた。

「え……？」

「鮎原、さん？」

ガシャンと地面にスマホがぶつかる音なんて、耳に入らないくらいに驚いた。

「……あ」

「鮎原さん、ですよね？」

一ヶ月ぶりに見るその端正な甘いマスクは、焦りで歪んでいるように感じた。

「え、えっと」

「僕のこと、覚えていますか？ 一ヶ月程前に、バーで一緒に飲んだ蒼井と申します」

「……」

私が忘れていたと思ったのか、副社長は私の手をギュッと握る。

忘れられるわけがないのに。むしろ忘れられないから、できるかぎり避けてすごしていたのに。まさか、こんなところで出会うなんて。

「今鮎原さんと呼ぶ声が聞こえてっ、もしかしたらと思って！」

気が付けば両手を握られていて、私はその勢いに圧倒される。

「ずっと、謝らなければいけないと思っていました！ いくら酔っていたとは言え、初対面であんなこと……」

「あ、あの……」

それ以上はどうか何も言わないで！

声にならない声に、口を開けては閉める。すると副社長もこんなところでは話ではないと気付いたのか、一度深呼吸をしてから続けた。

「すみませんでした。……ところで、僕はここのオフィスに勤めているのですが……。あの、今鮎原さんもここから出て来ましたか？」

「え、あ……」

否定も肯定も出来ないのは、周りからの視線が痛いからだ。

さっきまで副社長の周りにいたであろう女性社員達がものすごく私を睨んでくる。

「副社長とどういう関係なの!？」という視線が、私の身体に穴が開きそうなほどに突き刺さる。ど、どうしよう……。

どうすればいいのか頭をフル回転させて考えるものの、良い案は浮かばず。

「……あ、の！ ごめんなさい！」

副社長の手を振り切り、全力疾走でその場から逃げ出す。

「あ！ ちょっと！ 待ってください！」

後ろから副社長の焦ったような声が聞こえるものの、私は振り返らずに真っ直ぐ駅の方へ走った。十分ほど走って、駅を超えて裏にある路地に入り込む。

珍しく走ったからだろうか、なんだか頭が痛くなってきた。くらりと揺れる視界。目眩が酷い。冷たい空気が肌を刺すように吹き抜け、息を吸うごとに肺から冷えていくような気がした。

目眩で立っていられなくなつて、その場に倒れるように座り込む。

息が上がる。頭がクラクラする。酸素が足りない感覚。

……ああ、酔い潰れた時と同じだ。

そんなことを思つて少し笑った。

時間を確認しようとして、スマホを地面に落としたままだと気が付いてまた笑った。

「はあ、はあ、はあ、……本当、何やってんの私……」

自分が惨めで、情けなくて。

下を向くと、目尻に滲んだ涙が一粒こぼれ落ちた。

——そんな時に、また声が出た。

「鮎原さん？ ……鮎原さん!？」

それは副社長の声で、私を見つけた途端に膝をついて私の肩を抱くように起き上がらせた。

「大丈夫ですか？ どこか具合でも？」

「……だいじょうぶ、ですから。お気になさらず」

断つたつもりが、副社長は何故か嬉しそうに笑った。

「その声、喋り方。やっぱり鮎原さんだったんですね」

「はあ……はあ」

「それよりも、全く大丈夫に見えません。病院に行きましょう」

「いえ、大丈夫ですからっ」

「ダメです。タクシー呼びましょう」

「だからっ……」

もう放つておいてほしい。大丈夫だと言っているんだから、私のことなんて気にしないでほしい。

それなのに有無を言わさないというような視線を向けられ、仕方なく口を閉ざす。

そのまま拾ったタクシーに詰め込まれ、病院へ連れて行かれることになった。

「鮎原さん。これ」

「え？ ……あ、私のスマホ」

「僕のせいで、すみません。画面割れてたりは……」

「……いえ。ケースしてるので大丈夫そうです」

「良かった……」

本当に安心したように微笑む彼に、受け取ったスマホを持つ手に力が入る。

「ありがとうございます」

お礼を伝えると嬉しそうに微笑むから、胸がきゅつと締め付けられる。

……明るいところで改めて見ると、やはりとんでもなく美形だ。かつこいいとかよりも、綺麗が似合う容姿。

こんな綺麗な人の隣に平凡な私が乗っていることが信じられなくて、そつと車窓に視線を移した。病院に行くとは言え、時間も時間だったためタクシーが向かった先は夜間病院だった。

「鮎原さん、行きましょう」

「あ、あの。タクシー代」

「そんなのいいですから。ほら早く」

「はい……」

お金を払うことも許されず、手を引かれ受付へ。時間がかかるから帰ってほしいと伝えたのに、副社長は頑なに帰ろうとはしなかった。

それどころか診察室にまでついてこようとするものだから、私は涙ながらに止めてどうにか一人で診察室に入る。

「今日はどうされましたか？」

「えっと……急に目眩がして。頭も痛くて」

「微熱がありますね……吐き気は？」

「……言われてみれば少し、あるかも」

こんな症状で夜間病院だなんて、迷惑極まりないだろう。頭痛薬だけもらったらすぐに帰ろう。そう思っていた。

それなのに。

「薬出すために一応聞きますけど、妊娠の可能性はありませんか？」

「あ、はい。大丈夫で、す……」

言いきろうとして、初めて気がついたことがあった。思いついたまま口にする。

「そういえば……今月、生理来てないかも。いえ、来てません」

「周期はいつも安定していましたか？」

「はい、毎月大体二十八日周期です……」

普段からあまり周期がずれることもない。毎月予定日前後に必ずくる。

「生理予定日は？」

「あ、ちよつと待ってください」

慌ててスマホを取り出し、アプリで予定日を確認した。

「え、つと……先週の頭、ですね」

ぞわりと、背筋が凍りそうな程の悪寒がした。

全身の血液が、サーつと下に落ちていくような感覚に目眩がする。

今まで減多に遅れたことがない生理予定日。ほんの少しの吐き気と微熱。頭痛と目眩。

「先週ですか。少し遅れていますね」

「え……私、妊娠してるんですか？」

「検査してみないと、今の時点ではそれはまだわかりませんが、お心当たりがあるなら可能性はゼ

口ではないかと」

心当たり……と言えば、あの一夜だけ。

「ただ専門医は今日いないので、可能性があるなら薬は出さないでおきましょうか。漢方薬だけ処方しておきますね。紹介状を書くので明日にでも一度産婦人科に行ってみてください」

もう、そうかしら思えなかった。

だって、そう考えれば全て辻褃が合うから。

「鮎原さん？ どうでした？」

待合で待つていてくれたらしい副社長は、心配そうな視線を送ってくる。だけど、私の頭の中は静かにパニックになっていて。

……もし、妊娠しているのだとしたら。相手は副社長しか考えられない。まさか。あの時のたった一回で？

何も喋らずにブーツとしている私を見て心配そうに顔を覗き込んでくる副社長。

そんな姿を見つめていると、この現実が信じられなくて。でも身体は正直で。どうして？ まさか？ とぐるぐる考えを巡らせているうちに吐き気を催した。

「鮎原さん？ 大丈夫ですか？」

「つ……ちよつと、ごめんなさい……」

「鮎原さん!？」

副社長の心配をよそにトイレに駆け込んで吐くものの、胃液しか出ない。そういえば、お昼も食

欲がなくてほとんど食べられなかったんだった。

鞆に入っていたミネラルウォーターで口を軽く濯ぐと、ズルズルとしゃがみこんだため息をついた。

……気持ち悪い。早く帰って寝たい。

もう何も考えたくなくて、しばらくブーツとしてからトイレを出た。

「鮎原さん、大丈夫ですか？」

「……」

「鮎原さん？」

呼ばれていることに気が付かなくて、肩を叩かれてようやく正氣に戻る。

「あ……」

心配そうに見つめてくる副社長に「ただの風邪」だと嘘を吐くと、安心したように深い息を吐いていた。

「良かった。……タクシー呼びますから。もう少し待つててください」

「え、いいです。歩いて帰りますから」

「こんな時間に体調が悪い人を歩いて帰らせるわけじゃないですか」

その笑顔に申し訳ないと思いつつも、少し安心している自分がいた。

その後彼が呼んでくれたタクシーに乗り込んで、後ろの車に乗り込んだ副社長とは別々に帰る。

真っ直ぐに帰ろうと思っていただけ、家の冷蔵庫に今何もないことを思い出して家の近くのド

ラッグストアで降りしてもらい、そのままお店に入った。

ここは青果コーナーや精肉コーナーもあるドラッグストア。お惣菜はないけれど、手軽に食べられるものは揃っている。

とにかく何か食べないと。

サラダチキンとフルーツ、あとは適当に好きなものを選んで籠に入れた。

そしてふと、目に入ったものを恐る恐る籠に入れてレジに持って行った。

自宅に帰り、震える手でドラッグストアの袋から小さな箱を取り出した。

……初めて使う、妊娠検査薬。

お店で買って来たのは漫画やドラマでしか見たことのないもの。箱を開けるのにもたつくくらい、緊張していた。

取扱説明書を何度も読みながら、トイレへ向かう。

——数分後。

「……あ、これって……」

検査薬の中央の窓にくっきりと浮かび上がった二本の線。説明書を見ると、それは間違いなく陽性を表していた。

「よう、せい……」

へなへたと床に座り込む私は、バクバクとうるさい心臓を手で抑えながら、反対の手で無意識に下腹部も抑えていた。

……ここに、赤ちゃんが……？ 本当に……？

信じられなくて、過呼吸のように息が上がる。

「……はあ……はあ……」

次第に目に涙が溜まり、目尻から頬を伝って膝に零れ落ちた。

「……これから、どうしよう……」

産むとか、産まないとか、今は何も考えられない。

ただひたすらに、これからどうすればいいのかと疑問と焦りが頭の中を駆け巡る。

妊娠って、なに？ 私はこれからどうすればいいの？ 仕事は？ 転職は？

パニックになり、震える手でポケットからスマホを取り出す。

「静香……お願い、出て……」

こんな時に頼れる友達は静香くらいで。藁にもすがる思いで電話をかけた。無機質なコール音がこんなにも長く怖いと感じたのは、初めてだった。

『——もしもし？』

「静香！ 遅くにごめん……私、どうしようっ」

『え？ 何？ どうしたの？』

「どうしようっ……どうしようっ」

平常心ではない私はそれしか言えなくて、静香が焦ったように

『大丈夫!? 何があったの!?』

と声を掛けてくれた。

「わ、私……妊娠したみたい」

『……え？　どういうこと？』

「あの時なのはわかるんだけど、でも一回しかしてないのに……どうしよう静香！」

『とりあえず落ち着いて。今からそっち行くから、ちよっと待ってて』

電話を切った静香は、それから三十分ほど家に来てくれた。

「美玲！」

「静香……ごめんね急に……」

「何言ってるの。美玲の一大事じゃん！　来るの当たり前だし、頼ってくれて嬉しいよ！」

「静香……ありがとう」

赤い目で静香を出迎えて部屋に通すと、買ってきてくれた麦茶を飲ませてくれた。

「少しは落ち着いた？」

「……うん」

気持ちが悪く落ち着いた頃、何があったのかと聞いてくる静香にゆっくりと先程の検査薬を見せた。

「これ……」

「一ヶ月前、うちの会社の副社長と……その、いろいろあって、ワンナイト、みたいになっちゃって」

「うん」

「でもその時は、酔いが覚めたら怖くなって逃げちゃって。忘れようと思って」

「うん、ゆっくりでいいよ」

背中をさすってくれる手が、優しくまた泣きそうになった。

「でもその時に……できてみたいで。今日、具合が悪くて夜間病院に行った時、妊娠の可能性ありますかって言われて、そういえば生理来てないって思ってた……」

「うん」

「それで、帰りにこれ買って……今日の病院は産婦人科の先生いないからって、明日にでも産婦人科行ってみようって言われたんだけど、どうしたらいいかわかんなくて……」

私の支離滅裂な言葉たちを、静香は遮ることもなく真剣に聞いてくれた。

「うん、そっか。話してくれてありがとう。まずはゆっくり深呼吸しようか」

静香に言われるがまま、何度も深呼吸を繰り返す。するとざわざわとしていた心がまた少し落ち着いてきたような気がした。

「待ってね、ちよっと頭の中整理させて」

「う、うん」

静香はそう言っただけでしばらく考え込むように麦茶を飲んだ後、

「こんなこと聞くのもアレなんだけど……他に考えられる相手はいないの？　確か彼氏いたよね？」
恐る恐るそう聞いてきた。

静香の疑問はもっともだ。私だって、今この状況が信じられないのだから。

「それが……副社長とそうなる何日か前に別れて……」

「え、そうなの!？」

「うん。ずっと二股されてたの。それで、別れる前も全然そんな雰囲気にならなかったから、先月どころか元彼とは全然してなくて。だから時期的に考えても、副社長以外ありえないんだ」

「そうだったんだ……」

再び考え込むように口を閉ざした静香だったけれど、少ししてふと思いついたように私に視線を向けてきた。

「待って?　　ってことは、その副社長は……その時、避妊してなかったってこと……?」

「……うん。私もだいたいぶ酔ってたからはつきりしたことはわからないけど、多分してくれてたとは思う。……もしかしたら、失敗したのかもしれない」

改めて思い返してみると、あの朝、ホテルで起きてから服を探している間に、開封済みの避妊具の袋のようなものを見たような覚えがある。

さすがにゴミ箱の中までは見ていないから、はつきりとしたことはわからないけれど。

しかし検査薬は陽性を示している。生理予定日から考えても、線の出方から考えても、偽陽性ということはまず無いのだろう。

「……まあ、避妊してたとしても絶対妊娠しないわけじゃないしね。失敗する人もよくいるって聞くし」

「……うん。そうだね」

「はあ……。過ぎたことはもう何も言うつもりはないけど。美玲、あんた波乱万丈すぎ」

「私だつて好きでこんなことになってないよ……」

麦茶を飲みながらテーブルにだらんと身体を預ける。なんだかんだ、静香に打ち明けたことで少し頭の中が整理されたような気がした。

しかし、そうなると今度はこれからのことを考えないといけないわけ。

「美玲は、その副社長のことが好きなの?」

「……ほとんど初対面みたいなもんだったから、好きとかそういうんじゃないよ」

「お酒の勢いもあったんだっけ?　　だいたい酔ってたって言ってたもんね」

コクンと頷くと、静香は深い溜め息を吐いた。

「まさに一夜の過ちってやつだね……」

「……」

その通り過ぎて何も言えない。

「何にせよ、まずは明日にでも病院に行つてしっかり検査してくること。そして、その副社長にも話すこと」

「……え!?　　話すの!？」

「話さないでどうするの?　　その子の父親なんでしょう?」

「そ、うだけ……でも、それで話して責任取る、みたいになっても困るよ。相手はあの副社長だし。ワンナイトしただけなのに……」

下を向いて否定する私に、静香は呆れた視線を向ける。

「結婚するとかしないとか、私からすれば正直どっちでも変わんないけどさ。どっちにしても心も身体も傷付くのは美玲なんだよ。相手にも責任があるんだから。それは話すべきでしょ。それに万が一墮ろすにしたって相手の同意サインが必要だってわかってる？」

言われて初めて気が付いた。

「……そっか」

墮ろすという選択肢。

「……どうやって産んで育てるかしか、今は考えてなかった」

検査薬をした直後は頭の片隅にあったはずなのに、今は墮ろすという選択肢が頭の中から抜けていた。

「産むつもりだった、ってこと？」

「……なんだろう……。自然と、そう考えてた」

下腹部を摩りながら、ポツリと答える。

静香はそんな私を見ながら、そっと微笑んでくれた。

「なんだ。ちゃんと受け入れてるんだね」

「え？」

「でも考え無しに決めるのは反対」

「……」

「まずは病院行つてから、どうするか考えよう。しっかり検査してもらって、本当に妊娠してるのか確かめなきゃ」

明日は土曜日だし。そう言つた静香。

「そう、だね」

「不安なら私も病院付き添おうか？」

それはとてもありがたい提案だったけれど、首を振って断る。

「……ううん、一人で行く」

「そう？」

「うん。……けどやっぱり怖いから、病院終わつてからまた相談乗ってくれる？」

「ははっ、もちろん。オッケー」

二つ返事で了承してくれた静香に、何度もお礼を言った。

今日は無理を言ってしまったのもう遅いのと私が落ち着かないため、静香には泊まってもらった。

狭いベッドの中、静香が笑いながら一緒に寝てくれて安心できた。

静香がいてくれて、本当によかった。

気が付けばそのまま眠りに落ちて、次に気がついたのは翌朝。静香に見送られながら、朝から産婦人科の病院へ向かったのだった。

「鮎原さん、鮎原美玲さん」